

被災沿岸部「最後の1校」夏に別れ

大船渡 涙と感謝



未曾有の苦難を乗り越えて挑んだ夏が終わった。第93回全国高校野球選手権大会(8月6日から15日、甲子園)の地方大会は21日、39大会で234試合が行われ、岩手大会の準々決勝では、大船渡が2-1で優勝候補の花巻東に敗れた。同校の敗退により、東日本震災による津波で壊滅的な被害を受けた沿岸部の高校は全て敗れ去った。きょう22日は34大会で183試合が行われる。

21日 甲子園への道
船渡が2-1

支援に救われた
甲子園に出場すること涙をこらえながら花巻東に千羽鶴を手渡し「甲子園まで持って行ってください」と夢を託す氏家主将



で、震災で傷ついた街を活性化したい。そんな一心で戦った特別な夏が終わった。それでも、ナインの表情には充実感がにじんだ。「応援してくれた人たちを、少しは元気にできたかなと思う。多くの支援を受けてこの大会に出場できた。野球をやらせてもらって感謝している。大船渡の野球を見てくれてありがた

とう」と言いたい」
横浜のバットで
氏家主将は涙ながらに胸を張った。東日本震災による津波で10人以上の部員の家が流され、2人が親を亡くした。大切にしていた野球道具も流され、悲しみのどん底にいたナインを救ったのが、全国各地からの支援だった。5月に練習試

合を行った鶴川(北海道)の部員からはスパイクなどの野球道具とともに「震災に負けるな」と激励のメッセージを送られた。この日は、横浜(神奈川県)から差し入れられたバットで戦った。9回に1点を返すなど、シールド校の花巻東相手に最後まで粘った。氏家主将も「これからの大船渡にとって大

氏家主将「ありがとうと言いたい」

津波で甚大な被害を受けた岩手県沿岸部の高校は全て敗れた。だが、氏家主将には夢の続きがある。「将来は教師になって、地元の子の世代に今回の経験を伝えたい。野球も教えてみたい」。大船渡ナインはこの夏を生涯忘れることはない。(東尾 洋樹)

事な1点」と話した。同校は84年センバツに初出場し、ベスト4。その勢いは「大船渡旋風」と呼ばれた。当時主将を務めていたのが、現在チームを率いる吉田亨監督。被災しながら一回り大きくなったナインを見つめ、「最後までたくましく戦ってくれた選手に感謝したい。野球があったから生活にも筋が一本通った」と称えた。

△花巻東・大船渡▽花巻東に敗れスタンドにあいさつする大船渡ナイン(撮影・高橋 雄一)
2年ぶり4強
△岩手花巻園▽大船渡を下し、菊池雄星(西武)を擁して甲子園に出場した09年以来、2年ぶりの4強進出を決めた。最速151km/hの2年生エース大谷は登板機会がなかったが、「3番・左翼」で先発して2安打1打点。佐々木洋監督は20日の久慈東戦で左足がつって降板した大谷について「きょうも展開によっては投げさせようと思っていた」と話した。